「生きよ」2025 年8月 31 日土浦めぐみ教会礼拝メッセージ（奨励）

井上貴詞

導入

おはようございます。

本日の聖書箇所とメッセージタイトルは、先週の崔先生とのそれはほぼ一緒で驚かれた方もいると思います。崔先生と私が一番驚き、先週目を丸くして顔を見合わせました。なぜなら、どちらも一カ月前にこの聖書箇所からメッセージをするようにと神様に示されていたからです。

本日は障がい者福祉礼拝です。エゼキエル書を中心に、私が受けた神様のめぐみも分かち合いながら、いのちの尊厳と「生きよ」という神様の教えと語りかけを聞いて参りたいと思います。

まずは、本日の中心聖句エゼキエル書　18 章 31～32 節をお読みします。

あなたがたが行ったすべての背きを、あなたがたの中から放り出せ。このようにして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか。

わたしは、だれが死ぬのも喜ばない――神である主のことば――。だから立ち返って、生きよ。」”　　エゼキエル書　18 章 31～32 節

1. からしだねが存在することの意味

どんな罪人も神に立ち返るなら生きる。これは先週のメッセージでも触れられました。そこでもう一つ大事なポイントは、偶像礼拝、姦淫、隣人に対する虐げ、冷淡な態度が一体的包括的に述べられていることです。18 章 7 節から 9 節を見ます。

7:だれも虐げず、質物を返し、物をかすめ取らず、飢えている者に自分の食物を与え、裸の者に衣服を着せ、
8:利息をつけて貸さず、高利を取らず、不正から手を引き、人と人との間を正しくさばき、
9:わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守って真実を行う。このような人が正しい人であり、この人は必ず生きる――神である主のことば。”

エゼキエル書　18 章 7～9 節

福音は、やがての新天新地の完成に向けて、人のたましいの救いから被造物世界全体の回復までに至る神様の壮大なご計画です。ダイナミックで包括的です。これは福音的なキリスト教の世界基準の理解です。ですから、人間の罪も、個人の罪から隣人への態度、環境保護まで包括的に理解される必要があります。すなわち、少し厳しく言うのであれば、毎主日ごとに礼拝を守り、献金をし、祈り、教会内の奉仕に勤しんでいても、私たちの社会・被造物の中にある人々の痛み、うめき、嘆き、破れに無関心であっては、それはキリストによって義とされた者として歩みの半分しか歩んでいないということです。

それゆえに、めぐみ教会でからしだねの働きが存在することは絶大な意味があります。直接的に福祉の仕事を生業（なりわい）としていなくても、教会全体が障がい者と共に生きようとすること、障がいがあることで人を排除しないコミュニティをめざすことで、私たちはその神様からの期待に応答できます。からしだねの働きを直接していなくても、祈り、支援し、間接的に応援することで、このめぐみのわざを共に担うことができるのです。ちょうど海外へ派遣される宣教師にすべての人が召されていなくても、その宣教師の働きのために、祈ったり、献金したり、手紙を書いたり、現地を訪問したりなどできることをそれぞれがすることで、間接的であっても、宣教のわざの一端を担っているという事と同じです。

この夏私は、短い時間でしたが、からしだねのこどもたちと過ごす体験をさせていただきました。そこで知り合ったあるお子さんは、ほとんど話すことができません。でも、自分にとってその人が不快な人か、快を与える人かは鋭くわかるようです。現在私は、週に一回喜楽希楽サービスの送迎奉仕をしているのですが、先週もその時の朝にそのお子さんが保護者の方に連れられてからしだねに来られる場面に遭遇しました。私が「〇〇ちゃん、おはよう」と手を伸ばすと、握手はしてくれませんが、グータッチならぬグーバンチをしてくれます。グーバンチはちょっと痛いですが、私は飛び上がるほどのその瞬間をうれしく感じます。それはその子にとって、ご両親はいわずもがな教会に来て多くの人に、何よりも神様に愛されていることの現れだと感じられるからです。航空チケットもスーツケースもパスポートもなくても、気軽に身近に宣教体験が得られる場所がめぐみ教会にはあるのです。これは大きなめぐみと特権です。中高生のみなさんは、職業体験や将来の自分の進路を探す時に、こんな教会の身近な宣教地を訪ねてみてはいかがでしょうか。心からお勧めします。

2．「生きよ」でなく、死に追いやる現代のメッセージ

現代社会には、「生きよ」ではなく、死に追いやろうとするメッセージが満ちている生きにくい社会です。日本の自殺者数は、減ってきたとはいえ、年間2万人強と G7 の 7 か国の中ではトップクラスです。コロナ禍では女性や子どもの自殺者数が非常に増えたことは、日本特有の顕著な現象でした。 子どもたち、小中高生の自殺は増え続け、2024 年に 527 人と過去最高を更新しています。日本社会には、「生きよ」というメッセージとは反対の「自己責任だ、自分で始末せよ」というに無言の圧力に満ちています。

昨年 2024 年7月 3 日、旧優性保護法による障がい者の不妊手術強制が、法律制定当時から憲法違反であったという最高裁判決が出ました。判決文では、「『個人の尊厳と人格の尊重の精神に著しく反する』、差別的なものであり、憲法第13条及び第14条第1項に違反するものであったことを認め、同規定の立法行為は違法であった」と判断したのです。国は敗訴して賠償を命じられました。

戦後まもなくの 1948 年から 1996 年までの 48 年、実に半世紀もの間、障がいなどを理由に

不妊手術を受けさせられた人は実に 2 万5千人、人工妊娠中絶を強いられた人は 5 万9千人と報告されています。実際はもっと多いでしょう。生命の軽視、国家権力による人の命の抹殺は、戦争をしていないこの日本でも公認された制度の中であったわけです。また、「不良な子孫の出生を防止する」という規定を盛り込んだ旧優生保護法の影響は、法律制定後中絶数が急増した事実と多いに関係がありました。実のところ、戦後の日本で 3890 万人の胎児すなわちう、お母さんのおなかに宿った小さないのちが奪われたという報告があります。この数3890万人という数は第 2 次世界大戦で亡くなった日本人の数の 12 倍、ユダヤ人ホロコーストの大量虐殺者 600 万人の 6 倍以上の数です。

この最高裁の判決に対して日本弁護士連合会は、被害者の全面的救済を求める会長声明を 7 月 3 日即日に出しています。また、日本を代表するソーシャルワーカーの団体「私たちソーシャルワーカーは人権と社会正義を原理とする専門職でありながら、過去においてこの著しい人権侵害に対して無自覚に加担してきたことも事実です」とその失態を認めて猛省と謝罪の声明を出しています。ソーシャルワーカーである私もその罪の加担者でした。

優生思想とは、生まれつき「優秀な人」と「劣った人」がおり、「優秀な人」の子孫を残すことを奨励し、「劣った人」の子孫を残すことを防ぐことで、人間の集団の改良を図るという考え方です。優生思想は、半世紀にわたって「不良子孫防止」つまり障がい児抹殺の悪魔の思想として、人々の心に棲みつくようになったのです。

エゼキエル書 3 章 17 節を見ると、エゼキエルの預言者としての使命のひとつは見張り人であることがわかります。現代社会においてもクリスチャンは、社会の見張り人として立ち位置があります。しかし、自分も含めて無自覚な罪の中にいました。エゼキエルの時代にイスラエルの民が罪の中にあっても無自覚であったこ事と変わりがありません。

3. 当事者性と当事者から学ぶこと

からしだねの放課後デイサービス等の働きは継続されていますが、訪問系のサービスは、現在担い手がいない事で昨年から休業し、現在は休止中です。個人名は控えますが、重い障がいのある教会のメンバーにも障がい者支援のクリスチャンヘルパーが派遣され、そこに麗しい愛の交わりと営みが主のみわざとして実践されました。でも、今は休止し、このまま今年度が終わると、訪問系のサービスは廃業となり、訪問系の障がい者支援事業は指定の取り消しになります。この点に心が痛みますでしょうか。少なくても、神様は心を痛めていると思います。エゼキエル書 22 章29節 30 節にはこう語られています。

29 民衆も虐げを行い、物をかすめ、窮する人や貧しい人を苦しめ、寄留者を不法に虐げた。

30 この地を滅ぼすことがないように、わたしは、この地のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口に立つ者を彼らの間に探し求めたが、見つからなかった。”

エゼキエル書　22 章 29～30 節

神様は、破れ口に立つ人を探しています。それは神様の心痛むような悲痛な思いでもあります。私たちの日々気にかけているのは、神様が全く気にかけないような余計な心配であったり、神様からみれば些細なことであったりします。反対に神様が心を痛め悲しまれることに無関心であったりすることはないでしょうか。無関心と沈黙は、時として世の悪と罪の加担者に私たちをさせてしまいます。

また、もう一つ、私たちの心が痛まない理由があるとすれば、当事者性の欠如ということです。私は、これまで全国の教会を 50 カ所以上訪問してきましたが、どの教会も高齢化の課題は口にしますが、障がい者福祉の課題を口にする教会はわずかです。高齢化は、だれも高齢者になるので当事者性の高い課題です。でも、障がい者の場合は、障がいを自ら有したり、その家族でないと当事者性に乏しく、自分事として考えることができないのです。

しかし、私たちが当事者性を身につけることができる方法があります。それは当事者の友となることです。その友人から自分の罪や失敗を示され、時に傷つき、教えられ、悔い改める経験ではないかと思います。私のそうした罪や失敗談を実例としてふたつほど分かちます。

証し①障がい者を傷つけた手紙への対応の罪

最初の体験談は、障がい者を深く傷つけた私の罪、失敗談です。

今のように LINE どころか E メールも普及していない時代の話です。教会に来られた軽度の知的障がい者と知り合う機会がありました。教会にはたまに来られる方でした。互いの連絡先を交換して、その方は、私に手紙を書いて下さったのです。しかし、私は自分の返事を出さないまま一カ月放置してしまったのです。そうすると、その方からどうして返事をくれないのか怒りを露わにした 2 通目の手紙をもらうことになりました。その当時は、とても忙しかったし、もともと筆不精さで今も紙と便せんで手紙は滅多に書かない私です。ですがそれは言い訳で、その方に対していつの間にか上から目線になり、対等な友人と扱っていなかった傲慢さを示され、頭をハンマーで殴られたような衝撃でした。その方がどんな思いをもって一生懸命に手紙を書いて下さったかを想像も共感もできない私の罪、失敗でした。

証②重度の障がい者に励まされ、癒された。

次の体験談は、ケアマネジャーの仕事をしていた頃の出来事です。筋萎縮性硬化症（ALS）という進行性の難病に冒されたまだ 40 代の障がい者の支援を担当しました。仮に A さんとしておきます。

ALS にかかると全身の筋力が低下し、数年で寝たきりになり、人工呼吸器も必要になります。

A さんとのコミュニケーションは、ベッドの上に特殊なアームで装着したノート PC をわずかに動く唇で意思伝達装置のセンサーにあてて、パソコンから機械的な音声で話すという方法でした。食事も管で直接からだに流す経管栄養でした。

Aさんはの自宅へは介護ヘルパーや訪問看護師が 1 日に複数回訪問します。一週間のうちに、訪問診療の医師やリハビリの理学療法士、訪問入浴サービスのスタッフ、人工呼吸器や福祉用具の業者さん、ショートステイを受け入れてくれた障がい者支援施設の職員、沢山の方がその方の自宅に出入りしていました。そのアレンジとコーディネイトをするのが私の仕事でした。

この病気は日中訪問サービスの来る隙間の時間にも、30 分の一回の痰の吸引が必要です。夜間帯に来てくれるヘルペーはその地域ではいませんでしたので、仕事をしている奥様が 30 分おきに痰の吸引をしなくてはならず、疲労で倒れそうになりました。

そして、さらにその A さんに様々な重い問いを投げられました。「毎日看護師やヘルパーほか多くの方が自分の世話をしているけれど、その都度に『ありがとう』の感謝の言葉も簡単に出すことができない苦しみが井上さんに理解できますか」「呪いのようなこの病魔に襲われて私は死んだ屍になっている自分の姿の夢を見るんです」などなどです。

安易な慰めの言葉など通じない、実存的で圧倒的な深い苦悩、スピリチュアルペインを抱いていたAさんに私はすっかりたじろぎ、訪問の度に足がすくんでいました。その方のケアマネジャーは私が二人目で、一人目の方は看護師を基礎資格と持つケアマネジャーでしたので、「なぜ福祉の基礎資格の私に担当を依頼したのか」「Aさんの重い言葉や家族の大変な状況は受け止めきれない」「A さんが本当に亡くなられて屍になっている夢をみてしまう。なんて自分はAさんに失礼な支援者なのか」、そんな疑念が生じるともう自分にはできないと精神的に打ちのめされてしまい、逃げだしたくなってしまいました。

そんなある時、訪問したAさんは、私の引き気味の態度を見透かし、こうおっしゃって下さったのです。

「医療の知識も大事だけど、たとえねたきりであっても小中高生の娘たちの成長を父親として見守っていたい。そのために支援のサービスを増やししたい。障がい者支援のサービスを増やすには行政との交渉が必要です。それはソーシャルワーカーの井上さんにこそできる仕事です。だから私はあなたを選んだのです」

私はこの時、 ヨハネの福音書 15 章 16 節のイエス様を言葉を想いだしました。

「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。」
ヨハネの福音書 15 章 16 節

また、マタイの福音書 25 章 40 節のイエスさまの言葉も思い起こしました。

「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしに

したのです。」マタイの福音書　25 章 40 節

私は、イエス様に語ってもらっているような、イエス様に出会ったような気持になりました。Aさんとの出会い、Aさんに教えられたこと、Aさんから何度も励まされたこと、これはずっと私の人生の宝になっています。

神様は、人間と比較することもさえできない聖なる聖なる超越した存在です。同時に独り子をこの世界に賜るほどに一人ひとりを愛して、まるで自分事のように心配し、愛し、あわれみ、あきらめないお方であり、私たちのこころに聖霊によって住んで下さる方でもあります。すなわち、神様こそが罪の奴隷という悲惨な状態に置かれている私たちひとり一人に最も当事者性を持つ方なのです。それは私たちへの神のほと走るような愛、あわれみのゆえです。最後の聖書の引用としてホセア書 11 章 8 節を見てみます。このみことばは、福祉の働きを志そうとした大学生時代に神様に示された強烈なみことばでした。

”エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができるだろうか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができるだろうか。どうしてあなたをアデマのように引き渡すことができるだろうか。どうしてあなたをツェボイムのようにすることができるだろうか。わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。”
ホセア書　11 章 8 節　聖書 新改訳 2017©2017 新日本聖書刊行会

結び
メッセージの結びに入ります。
エゼキエル書から示されたことは、私たちは罪の無自覚であり、神に立ち返って聖書全体を貫く「生きよ」という神様のメッセージに押し出されて、使命に生きることです。その使命とは、福音の光を掲げつつ、社会の破れ口に立つことです。

私たちは神様にどう呼びかけられているでしょうか。その神様の呼びかけの小さき声を聞き分けられるように日々聖書を読み、こころの耳を澄ませているでしょうか。日々の雑事や学校の宿題や受験勉強、仕事に追われ、いっぱいいっぱいになって神様の呼びかけを聞き逃していることはないでしょうか。小さな神様の声は聴こえてくるのに、応答せず、それを無視している事はないでしょうか。もし、神様の小さな御声に耳を傾けず、別のものに夢中になり、没頭するならそれは偶像礼拝になっているのかもしれません。ヨハネの黙示録 3 章 1 節には、「あなたは生きているとは名ばかりで、実は死んでいる」とというみことばがあります。そんな死んだ状態になっていないでしょうか。
これらの問いに日々向き合い、応答しなくてはいけないと私も自らを戒める者の 1 人です。神様から心が離れ、この世の富や地位や権力などの偶像を慕って霊的に死んだものとならないように、日々悔い改め、新しい心と新しい霊をいただいて、本当の意味で生きる者、また人を支配する者で

なく、生かすと者とならせていただきたくこころから願います。お祈りします。

大牧者イエス・キリストの父なる神様

主の御名を賛美します。

71 年前にこの土浦に福音の種がまかれ、10 年前に障がい福祉の種「からしだね」がこの教会に蒔かれました。その豊かな成長と実りのゆえに心から感謝します。

人を死に追いやろうとする同調圧力と罪と悲惨に満ちた現代社会です。その世界で「生きよ」と言われる福音のメッセージを私たちが受け止め、また神様の呼びかけに応答して生きる者とならしめて下さい。

愛する主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。　アーメン